

アンドレ・ジッドの『狭き門』と『背徳者』について

—— 聖性と悪魔性 ——

加 藤 宏 幸

アンドレ・ジッドの『狭き門』は彼の作品の中でもっともよく読まれている。そして多くの人は、この小説は悲恋を扱った甘美な恋愛小説であると思っているのではなかろうか。そのような体裁をとってはいるが、ジッドはこの作品の中で非常に重要な問題を提起している。一方『背徳者』については、『狭き門』ほど読まれてはいないが、そこにもやはり重要な問題が提起されている。作者は問題を提起しただけで、それに対する回答は示していない。この2つの作品を対比することによって、その問題を明らかにしたいと思う。

I. アンドレ・ジッドの生涯

アンドレ・ジッド André Gide は、1869年11月22日にパリに生まれた。彼の父ポール Paul は南フランスのユゼス の生まれで、母ジュリエット Juliette は北フランスのルーアンの生まれであった。ジッド家は代々プロテスタントであり、ロンドー Rondeaux 家はジュリエットの祖父まではカトリックであったが、祖父の2度目の妻がプロテスタントで、ジュリエットの母もジュリエットもプロテスタントであった。

1877年(8歳)、アルザス学院に入学したが、病気がちで通学はきわめて不規則であった。ジッドの父はパリ大学法学部教授であったが、彼が11歳のときに死んだ。その後、厳しいプロテスタント的教育が母や伯母などによって彼に施された。

1882年(13歳)、伯母マチルド Mathilde の不倫と従姉マドレーヌ

Madeleine の苦悩を知ったとき、ジッドは彼女を一生守ろうと心に決めた。1885年(16歳)夏、ラ・ロックで、従姉のマドレーヌと宗教書を夢中になって読んだ。初聖体拝領をした。1887年(18歳)、アルザス学院の修辞学級に入学し、ゲーテ Goethe を発見した。翌年、アンリ4世校に転校し、スピノザ、ライプニッツ、デカルト、ニーチェなどの哲学書を読み耽った。1889年(20歳)10月、大学入学資格試験に合格したが、大学に進学する意思はなく、作家となる決心をした。

1890年(21歳)、マドレーヌの父が死去した。1891年(22歳)、ジッドはかねてから思いを寄せていた従姉のマドレーヌに求婚したが、拒絶された。「マドレーヌは彼の求婚を拒絶したが、これには3つの理由が考えられる。まず第1に、ジッドの母は、幼い頃から姉弟のような愛情で結ばれている2人の結婚にはっきり反対していたので、従順なマドレーヌは何よりもその意志を尊重したものにちがいない。第2に、自分の母の不義によって深く心を傷つけられていた彼女は、結婚生活に極度の恐れと不信を抱いていたにちがいない。第3に、極端なまでに謙遜深い彼女は、自分は従弟の思っているような理想的な女性ではない、従弟は実際のものとは違ったイメージを抱いて、幻に恋しているのではないかと心ひそかに恐れていたのにちがいない」(新庄嘉章解説「ジッドの生涯と作品」、新潮文庫版『狭き門』¹⁾)。ジッドは『アンドレ・ワルテルの手記』 *Les Cahiers d'André Walter* を匿名で発表した。アンドレ・ワルテルは従姉のエマニュエル を激しく愛しているが、心と心の触れ合いだけを求め、肉体関係を不純なものとして遠ざける。そのために、彼女は彼のもとを去る。しかし彼は、理想のエマニュエルを心に抱き続ける。

1892年(23歳)11月、兵役につくが肺結核と診断され、すぐに除隊した。1893年(24歳)10月、北アフリカに旅行し、一冬をビスクラで過ごし、健康を回復した。生きる喜びを知ったジッドは、1895年(26歳)に『パリュード』 *Paludes* を発表し、無気力な生活を送る人間を痛烈に風刺した。5月31日に母を亡くした。6月17日にマドレーヌと婚約し、10月8日にエトルタの寺院で結婚式を挙げた。10月から翌年の5月まで、

新婚旅行で再び北アフリカへ行った。2人の結婚生活の秘密は1951年の死の直後に出版された『今や彼女は汝の中にあり』*Et nunc manet in te*の中に詳しく述べられている。「ジッドは生来異常な性欲の所有者で、同性愛的な趣味を持っていたが、さらに、結婚当時は性欲に対して極端に無知で、マドレーヌのような清純な女性には肉体的な欲望はないと思い込み、彼女の肉体を所有しなかった。そして彼女の方では、夫の欲望の欠如を、自分の魅力の不足のせいにして、人前から身を引く生来の傾向をさらに深めていった。こうして、この不自然な出発はふたたびやり直されることなく、その間には、マルク・アルグレとの同性愛事件などもあって、夫婦は心から愛し合いながらも、その結婚はいわゆる《白い結婚》(筆者注:性交渉のない結婚)に終始し、ジッド夫人は処女妻としてこの世を送ったのである」(新庄嘉章解説「ジッドの生涯と作品」²⁾)。

1897年(28歳)、『地の糧』*Les Nourritures terrestres*を発表した。作家はナタナエルという名の1人の青年に話し掛ける。彼に、大地とそれがもたらす喜びに触れた真の生活を教えようとする。そして作家は、欲望の高揚、期待の興奮、熱狂の効力を誉め称える。

1902年(33歳)、『背徳者』*L'Immoraliste*を発表した。ミシェルはマルスリーヌと結婚してまもなく、肺結核にかかる。彼の若い妻は献身的に彼の世話をする。北アフリカ滞在が、彼の健康の回復を助ける。元気になった彼は、パリでキニク学派のメナルクの影響を受け、快楽に耽る。しかしながら今度は、マルスリーヌが病気になる。しかし彼は、彼女の世話をせず、彼女を無理に北アフリカに連れて行く。そこで彼女は見捨てられ、衰弱して死ぬ。

1909年(40歳)、「ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ」(通称*N・R・F*)誌に『狭き門』を発表した。1914年(45歳)、『法王庁の抜け穴』*Les Caves du Vatican*を発表した。ラフカディオは全く理由なく、同じ車室の客を列車から突き落として殺害する。《無償の行為》を敢行するラフカディオは、後に新しいタイプの人間として注目を集めることになる。この作品でジッドが宗教界を揶揄したことに憤慨したクローデルは、彼との仲を断絶した。1

1915年(46歳)から1916年(47歳)にかけて宗教的危機に襲われ、聖書を読み耽った。1917年(48歳)から1918年(49歳)にかけて、当時17歳であったマルク・アレグレとの同性愛に溺れた。マドレーヌは、青春時代から彼女が受け取ってきたジッドの手紙を全部焼き捨てた。

1919年(50歳)、『田園交響曲』 *La Symphonie pastorale* を発表した。スイスの田舎の牧師が無知で動物的だった盲目の少女ジェルトリュードを拾い教育する。彼女は知性的で美しい女性に成長する。牧師は次第に彼女に引かれていき、息子のジャックも彼女を愛するようになる。開眼手術を受けた彼女は、想像していたのとは全く異なる罪に汚れた世界を見て、絶望して自殺する。

1920年(51歳)、自伝的作品『一粒の麦もし死なずば』 *Si le grain ne meurt* 上巻を発表し、1921年(52歳)、その下巻を発表した。1923年4月(54歳)、エリザベート・ヴァン・リセルベルグ *Élisabeth Van Rysselberghe* との間に娘カトリーヌが誕生した。1925年(56歳)、『贋金づかい』 *Les Faux-Monnayeurs* を発表した。いくつかの筋が複雑に絡み合い、要約が不可能な作品である。ジッドはこの作品を唯一小説 *roman* と呼び、今までの小説の概念を完全に否定し、いわゆる《純粹小説》を書こうとした。マルク・アレグレとともにコンゴに旅立ち、植民地の惨状を見た。1927年(58歳)、『コンゴ紀行』 *Voyage au Congo* を発表した。この作品によって彼は、原住民の悲惨な状態を世間に知らせた。

1932年(63歳)、共産主義とソ連への共感を表明した。1935年(66歳)、『新しい糧』 *Les Nouvelles Nourritures* を発表した。ジッドは青年ナタナエルに、伝統や家庭など一切の束縛から自分を解放するように勧めた。6月にはマルローとともに、文化の擁護を目的とした第1回国際作家会議の議長を務めた。1936年(67歳)6月、瀕死のゴーリキーを見舞うためにモスクワに行き、その死後赤の広場で追悼演説をした。11月、『ソビエト旅行記』 *Retour de l'U. R. S. S.* を発表した。ソ連の欠陥を摘発したため、「プラウダ」紙に反論が掲げられ、フランスでも左翼陣営から非難を受けた。1937年(68歳)、『ソビエト旅行記修正』 *Retouches à mon Retour de l'U. R. S.*

S.を発表した。ジッドは共産主義との決別を表明した。

1938年(69歳)4月、マドレーヌ夫人を失い、深い悲しみと孤独感に襲われた。『今や彼女は汝の中にあり』*Et nunc manet in te*を書いた(1947年に限定出版され、1951年、ジッドの死後公刊された)。1947年(78歳)、ノーベル文学賞を受けた。1951年(82歳)2月19日、ジッドは長い生涯を閉じた。2月22日、マドレーヌの眠るキュヴェルヴィルの小さな墓地に埋葬された。

II. 『狭き門』³⁾について

(梗概) いとこ同士であるジェロームもアリサも幼いときからプロテスタンの厳しい教育を受け、その教義を忠実に守り成長してきた。そして毎日聖書を読み、聖書の内容について2人でしばしば語り合った。思春期に入り、2人は互いを強く意識するようになった。アリサの母が愛人の中尉と一緒にいるのを見て、アリサは激しいショックを受けた。苦しむアリサを見て、ジェロームは一生彼女を愛し続ける決心をした。母の不倫と駆け落ちは、アリサのその後の人生に大きな影響を与えることになった。礼拝堂で2人は、牧師が説教の中で、聖書の1節を読み上げるのを聞いた。《努力して狭き門より入れ。大きい門や広い道は滅びに通じ、そこを通る者は多い。命に通じる門は狭く、そこに通じる道も狭く、これを見出す者は少ない》。2人とも努力して狭き門から入る決心をした。ジェロームは厳しい生活をし、徳を高め、神の至福の世界に入ろうと決意した。彼はアリサにもそのような生活をするように勧め、彼女も喜んでそれに同意し、2人は徳を積み、お互いにとってお互いがふさわしい人間となったときに結婚することを誓った。

アリサは、妹のジュリエットもジェロームを愛していることを知り、自分は退き妹を彼と結婚させようとした。彼女は自分を犠牲にして、妹が幸せになることを望んだ。アリサにジュリエットとの関係を疑われたのではないかと思ったジェロームは、彼女を愛していることを証明するために婚約を申

し出たが、「私はそんなに幸福になる必要がないの」と言って断わられた。ジュリエットは姉の反対を押し切って、好きではなかったが、彼女に求婚してきたぶどう栽培業者と結婚した。ジュリエットは表面上は幸せそうに見えたが、アリサはそれはジュリエットが望んでいた幸せではないと思った。

ジェロームは兵役に服し、アリサと会うことも文通することもなく1年が過ぎた。そして兵役終了後彼は、アリサに会いに行った。散歩に出掛けたとき手を取り合ったが、自然と離れてしまった。親しく話することなく別れた。ジェロームはパリに帰って間もなく、アリサからもう再会するのは止めましょうと書かれた手紙を受け取った。「そして私をもっと悲しませたのは、あなたの手が私の手を放したからではなく、あなたの手がそうしなかったとしても、私の手がそうしたと感じたからです」⁴⁾。

ジェロームは復活祭の休みにフォングーズマールに来て、アリサに会った。彼が「われわれも幸せになろう」と言うと、「私たちは幸福になるために生まれてきたのではない」と言って、アリサにはね付けられてしまう。しかしまた、ジェロームはフォングーズマールでアリサに会った。彼が愛していたアリサは、もう存在しなくなっていた。

しかしながら、ジェロームは3年後の夏の終わりに再びアリサに会った。彼が「障害はすべてなくなったので幸福になろう」と言うと、アリサは「さようなら！これからもっともすぐれたものが始まるのです」言って、彼のもとを去って行った。ある時期からアリサは、ジェロームと会うのを拒否するようになり、一途に信仰を深めて行った。自分を徳へそして神へと導いてくれたジェロームに心から感謝し、彼を深く愛しているにもかかわらず、アリサは彼と会うのを何度か拒否した。彼女は、もしジェロームに会えば、彼への愛の方が勝り、神への愛は疎かになってしまうと思った。彼も私の方を愛し、彼が徳に向かってさらに深く進むのを妨げてしまう。彼は私を愛するよりももっとすばらしいもののために生まれてきたのだ。彼が私への愛だけにこだわり、もう発展することがなければ、そのような彼をもう自分は愛することはできない。アリサはジェロームを激しく愛しているからこそ、彼を退けようとした。

そして彼女は、心と命を神に捧げた。《神でないものはすべて、私の期待を満たすことはできない》⁵⁾ (パスカルの言葉) という状態に至って、アリサは小さな病院のむきだしの壁に囲まれた部屋で死んで行った。

(テーマ) ジッドの父ポールは南フランスのユゼスの出身であり、母ジュリエットは北フランスのルーアンの出身である。ジッド家は代々プロテスタントであり、ロンドー家は、ジッドの母ジュリエットの祖父までは、代々カトリックであったが、祖父の2度目の妻がプロテスタントで、ジュリエットの母もプロテスタントであった。『狭き門』の登場人物について言えば、それぞれにモデルがいる。話者ジェロームはジッド自身であり、ミス・フロラ・アシュバートンは母の昔の家庭教師であったアンナ・シャクルトンである。フォングーズマールは、ジッドの別荘があったキュヴェルヴィルの町である。ビュコランは叔父エミール・ロンドーであり、アリサはその叔父の長女マドレーヌであり、ジュリエットはその妹のジャンヌであり、ロベールはその弟のエドワールかジョルジュである。

叔母のリュシル・ビュコランはマチルド・ロンドーで、この叔母は小説におけると同じように愛人をつくり、家を出て行ってしまっている。ピューリタニズムの厳格な教育を受けてきたマドレーヌが、母の不倫と家出に深く傷ついたと思われる。小説においてアリサが、ジェロームとの結婚を拒否し、信仰の中に入っていくのは、母の不倫がその原因の1つであると考えられる。ジッドは後にマドレーヌと結婚するが、性的関係のない結婚生活を送ったのも、そこに原因があったと思われる。

ジッドの父はアンドレが11歳のときに死んだ。夫の死後母ジュリエットは子供の教育にいっそう熱心になり、アンドレにピューリタニズムの厳しい教育を施した。後にジッドはピューリタニズムを非難するような言葉を吐くことになるが、それは子供時代に受けた厳しいピューリタニズム教育に対する嫌悪からきたものであろう。

アンドレ・ジイド作 (川口 篤訳) 『狭き門』 (岩波文庫、1996) の「あとがき」で、訳者は次のように述べている。「読者の中には、アリサの純潔へのあこがれ、精神の昂揚、神に近づこうとする精進の美しさに目を奪われ、

この作を、あたかもピューリタニズム賛美の書であるかのように受け取る人も少なくないようである。それも無理からぬことで、作者は力をこめて、アリサへの共感をそそるように描いているかに見える。『背徳者』においても、作者は序文の中で、この作を、主人公賛美の書とも、告訴状ともするものではない、と断わっているが、自由解放であるような外観を呈している。／こう見ると、ジッドの作品には、テーゼとアンチテーゼとが共存し、読者に思考と判断を迫る体のものが多い。作者が一方向的に断定を下し、読者を説得し、読者に説きあかす作者ではなく、問題を提起して、共に考えようという作者である。しかし、作者は何も言いたいことがなく、何も断定しないのであろうか？敢えて言うならば、作者は、表面に出ているテーゼよりも、裏面にひそんでいるアンチテーゼにこそ、力点を置いているのではないかと、私は思う⁶⁾。『狭き門』についても、この作をプロテスタンチズムの擁護とか批判とか、神聖なヒロイズムの否認とか解してはならない。ジッドは、私が主人公を是認していると思うのも、プロテスタンチズムを風刺していると思うのも、共に当たらない、などと言っている⁷⁾。しかし、これと矛盾する次のような言葉も吐いている。「私は、批判の書を書いたのである……クロードルは、この書が、プロテスタンチズムの批判、つまり、徳をそれ自体のために愛することの批判であることを私に覚らせた。私の問題は、人間の目的は神なのか、人間なのか、ということであった。はじめ私は、人間の目的は神だと考えた。そのうち、次第に問題をずらして、人間の目的は人間だと考えるようになった」(1949年のラジオ放送)⁸⁾。

『狭き門』においてジッドは、自己をひたすら犠牲にして徳を追求し、ついには神を愛し神と一体となろうとするアリサに深い愛情を注ぎながらも、一方ではそのために不幸になって行く彼女を哀れんでいる。ジッドはアリサのこのような生き方も人間としての1つの生き方であり、それもすばらしい生き方であることを示そうとしたのではないだろうか。話者はジェロームであり、彼の側から一方向的に語られているけども、最後に「アリサの日記」を添えて、神へ向かう彼女の気持ちを詳細に語っている。『狭き門』においてジッドは、自己犠牲による徳の追求を批判し、さらにプロテスタンチズムを批判

したというのが一般的な意見であるが、ジッドがこの書物を書いたときには、そのような意図はなかったのではなかろうかと考えられる。クローデルなどがプロテスタンチズムの批判の書であると言ったので、ジッドもそれに同意したのではないだろうか。ジッドが『狭き門』を発表したのは1909年で40歳のときであり、彼がラジオ放送でクローデルの意見に同意し、人間の目的は神ではなく、人間であると述べたのは、1949年で76歳のときである。この年齢になってようやく、人間の目的は神であるか人間であるかという問題に回答を与えたのである。ジッドは『狭き門』で、人間の目的は神か人間かという問題を劇的な形で提起したのである。

Ⅲ. 『背徳者』⁹⁾について

(梗概) (第1部) ミシェルは死に瀕していた父を安心させるために、愛情もないのにマルスリーヌと結婚した。彼は24歳で、彼女は20歳であった。彼はプロテスタントで、彼女はカトリックであった。15歳のときに母を失ったミシェルは、父の影響を受けて、古代史の研究に励んできた。

結婚するとすぐミシェルは妻を伴って旅に出て、アフリカのチュニス行った。彼は咳が出て、胸の上部に痛みを感じた。暑さが健康を取り戻させてくれるだろうと思い、スースそしてエル・ジェームへ出掛けたが、帰りの乗合馬車の中でたくさんの血を吐いた。スースからビスクラまで、マルスリーヌは彼を懸命に看護した。彼女の看護と愛情のおかげで、ミシェルは少し生きる力を取り戻すことができ、起きることができるようになった。しかし彼はまた吐血した。彼はどうしても生きたいと思い、必死に努力した。病気が結核であることが分かった彼は、運動をし、栄養のあるものは何でも食べた。マルスリーヌの絶えざる看護のおかげで、彼は次第に快方に向かった。彼は、思考と同じくらい感覚が強くなってきたのに驚いた。翌日からマルスリーヌと一緒に散歩に出掛けた。恍惚として歓喜に浸り、感覚も肉体も高揚した。彼女の肉体を求めるようにもなった。

彼等はビスクラを立ち、イタリアの町のラヴェルロに着いた。ミシェルは自分の体を鍛えるのに全力を尽くした。彼の健康は急速に回復して行った。そして彼は日々、豊かな生、かぐわしい幸福の中に進んでいった。完全に健康を取り戻した彼は、マルスリーヌに感謝し、彼女が病気になることがあれば、今度は自分が彼女の看護をすることを心に誓った。そして旅行を短縮し、パリに戻った。

(第2部) ミシェルとマルスリーヌはすぐにパリを去り、ノルマンディーにあるミシエルの所有地であるラ・モリエールに来た。着いてから1週間後、彼女は妊娠していることを彼に打ち明けた。昔の混乱は消え去り、彼は落ち着いていた。マルスリーヌは、自分が生きることと同じくらい、彼が生きていることを感じることに喜びを感じていた。彼は馬で領地の見回りに出掛け、畑仕事を指揮したり、命令したりした。

秋が深まり気候が悪くなったので、11月の初めに彼らはパリに戻った。買物に忙しかったり、たくさんの訪問を受けなければならなかったりで、マルスリーヌはへとへとに疲れてしまった。ミシェルは歴史の講義をつづけ、多くの学者とも話をしたが満足できなかった。このようなときに、旧友の神秘主義者メナルクに再会した。3週間後に、今度は自分の家で彼に会った。マルスリーヌは彼が嫌いだった。この晩から数日後に、マルスリーヌの体調が悪くなりだした。そのうちに、メナルクと会う約束をした晩が来た。ミシェルは病気の彼女を見捨てて、メナルクに会いに出掛けた。メナルクはミシェルに言った。「幸福は出来上がったものじゃだめだ。自分の好みに合ったものでなければならない。—— 私は明日出発する。私は分かっている。私はこの幸福を自分に合うように裁断したんだ」¹⁰⁾。「私は過去を思い出したりしない。そんなことをすれば、未来が到着する邪魔をして、過去が侵食するのを許すことになるだろう。昨日を完全に忘れて、一刻一刻の新しさを創造するのだ。どうしても、幸福だったということでは私は満足できない。私は死んだものを信じないし、もはやないということは全然なかったと考える」¹¹⁾。この言葉は、ミシエルの考えの先を行くものであった。そして、彼の言葉の多くがミシエルの脳裏に刻まれた。

朝ミシェルが家に帰ると、医者が来ていた。マルスリーヌが夜中に激しい苦しみに襲われ、医者を呼んだのだった。彼女は子供を流産した。ミシェルは啜り泣きながら、ベッドに飛び掛かった。静脈炎であることが明らかになった。病気はますます悪くなり、血塊さえ吐き出した。ミシェルは彼女の病気はもう治らないと思った。

彼女の病気がよくなったので、パリからラ・モリエールに移った。彼女の病気がよくなるにつれて、ミシェルはしばしば家を明けるようになった。彼はマルスリーヌのことを忘れて、密猟に夢中になった。ある晩マルスリーヌは、加減が悪いので食事に降りて来れないとミシェルに言ってよこした。彼は彼女のところに駆け付け、「ここを立とう。ほかに行って、ソレントとどのときのようにおまえを愛したい。おまえは私が変わったと思っただろう。でもほかに行けば、われわれの愛が何も変わってはいないということをはっきりとを感じるだろう」¹²⁾と言った。5日後彼らは出発した。

(第3部) ミシェルは静かな幸福を求めようとはしなかった。疲れ切っていたマルスリーヌが自分の愛を必要としていたように感じたので、彼は見せ掛けだけの愛を彼女に示した。彼は彼女の苦痛を耐えがたく感じていた。彼らはパリを逃げ出した。最初の日から、彼女の体調は非常に悪くなり出した。呼んだ医者がアルプスの高地での静養を勧めたので、アルプスの上へと向かった。マルスリーヌが咳をすると、ミシェルはそれが止むのを願い、自分をもっと上手に咳をしたように思った。エンガディンに着き、彼らは広々とした部屋を2つ取った。ミシェルは、マルスリーヌは体が弱っているのだから、どんなにお金がかかっても贅沢させてあげようと思った。毎日、彼らは外出した。

彼はずっと前から、歴史研究には興味がなくなっていた。この町に来て2か月が経ち、すっかり退屈するようになったミシェルは、イタリアに行く決心をし、マルスリーヌを説得した。ミラノからフィレンツェへ、フィレンツェからローマへ、ローマからナポリへと、南へ下って行った。冬のナポリは陰鬱だったので、ローマへ戻った。ミシェルは1人になればこんなにお金がかかることはないだろうと思いながら、マルスリーヌの命が細って行くのを見

守っていた。慌ただしい移動にマルスリーヌは疲れてしまっていたが、もっとも彼女を疲れさせたのはミシエルの考えの恐ろしさであった。

ソレントからナポリへ行った。ミシエルは1日のうちほとんどマルスリーヌの側にいたが、マルスリーヌが寝てしまうと外へ出た。歓喜のあまり叫びたいほどであった。シシリア島のパレルモへそしてタオルミーナへそしてシラクサへ移動した。かつて彼らが同じ道を北へ向かっていたときには、ミシエルの病気は回復へと向かっていたが、今その道を南に進むにしたがって、マルスリーヌの容体は悪化して行った。彼女はいつも同じように彼に接し、非難の言葉は一言も発せず、いつも笑おうと努めていた。

シラクサを立ち、アフリカのチュニスへ、そしてビスクラへ来た。2年前に2人がかわいがっていた子供たちが現われた。ホテルに戻ると、マルスリーヌは震えていた。翌日夜明けから、モクティールも連れて、サハラ砂漠のオアシスであるトゥグルルに向かって、彼らは出発した。マルスリーヌは苦しんでいた。呼吸するときに吸い込んだ砂で喉が焼け、炎症が起きていた。彼女は旅で疲労困憊し、着くやいなや寝てしまった。彼女は何も食べようとしなかった。ミシエルは夕方まで彼女の側にいたが、力が尽きたように感じた。夜彼は、モクティールに町を案内してもらった。彼はホテルに戻った。マルスリーヌはやせた腕でベッドの格子につかまって座っていた。シーツにも手にもシュミーズにも顔にも血がべっとりついていて、彼女の手が絶望的に彼にしがみつки、彼を引き留めた。明け方にまた血を吐いて、死んでしまった。彼女は彼女が愛した私有の庭園の木陰に眠っている。

(テーマ) アンドレ・ジッドは1893年、24歳のときに北アフリカに旅行し、一冬をビスクラで過ごし、健康を回復し生きる喜びを知った。その体験に基づいて、『背徳者』は書かれた。

アンドレ・ジッドは『背徳者』の「序文」において、次のように述べている。「もし私の主人公を模範として示したならば、私は間違いなく成功しなかったであろう。ごくわずかな人たちがミシエルの物語に興味を示そうとしたのは、彼らの非常に善良な心で、彼を軽蔑するためであった。私がたくさんの

美德でマルスリーヌを飾ったのは、無駄ではなかった。人は、ミシェルが自分自身より彼女を愛さないことを許さなかったのである。／もし私がこの書物をミシェルに対する告訴状としたならば、さらに大きな成功は得られなかったであろう。なぜなら誰も、私の主人公に憤激を感じてはいたが、私に感謝はしなかったからである。この憤激を読者は、私の意に反して感じたように思えた。この憤激は、ミシェルから私自身に浴びせられるようになった。もう少して読者は私を彼と混同しようとした」¹³⁾。

ジッドはミシェルを模範的人物として描くことはしなかったし、また非難すべき人物として描くこともなかった。ジッドはミシェルについて彼自身の判断を下すことを控えた。しかしまたジッドはやはり「序文」で次のようにも言っている。「もしも幾人かのすぐれた人が非常に差し迫った、非常に広い関心と呼び起こす思想がこの作品に含まれていることを認めなかったとしたら、その責任はこの思想にも、このドラマにもなく、著者にある」¹⁴⁾。ジッドはこの作品においていくつかの思想、いくつかの問題を提示していると考えることができる。それではその問題とは何であろうか。結婚後ミシェルは妻のマルスリーヌを伴ってアフリカのチュニスに渡り、スースを経てエル・ジェームに行き、その帰りに乗合馬車のなかで吐血した。ビスクラで、肺結核にかかっていたミシェルは、マルスリーヌの献身的な介護を受けて、おいしいものをたくさん食べ、十分な休養をとり次第に健康を回復して行った。さらにビスクラで彼は裸になって強烈な太陽を浴びたり、黒人の少年たちと交流したりしたが、それらも彼の健康の回復を大いに助けた。ここには肉体の目覚めが歌われている。

しかし彼が健康を回復したのは、なによりもまずマルスリーヌの手厚い看護のおかげであった。ビスクラからイタリアを通過してパリに戻ったが、そのときにはミシェルは完全に健康になっていた。ミシェルはパリで旧友の神秘主義者のメナルクにたびたび会っているうちに、過去を捨て去り未来だけを見て生きなければならないという彼の考えに感化された。ミシェルとマルスリーヌはノルマンディーにあるミシエルの領地に住むことになった。

今度はマルスリーヌが病気になってしまった。しかしミシェルは彼女を

十分に看護せず、時には病気の彼女に束縛されるのを嫌がった。そして病気の彼女を連れて、スイスの高地、イタリアのいくつかの都市を旅し、かつて彼が健康を取り戻したビスクラに來た。ここでミシェルは1人で遊び回り、妻の看病を怠った。トゥグールで、ミシェルが夜遊びしてホテルに戻ると、マルスリーヌはたくさんの血を吐いていた。彼女はミシェルにつかまって死んで行った。

自分が病気のときに献身的に看護をしてくれたマルスリーヌが病気になっても、彼女を十分に看護しないミシェル、自己の利益のためにしか行動しないミシェル、このような主人公を通してジッドは、人間の奥底に潜む人間の悪魔性と自己中心性を暴きだしたのである。倫理的に見れば、ミ歇尔のような人間は当然非難されるべきであり、『背徳者』を読んだ読者の多くも彼の行いに憤慨するであろう。しかしジッド自身は、ミ歇尔という人物を非難していない。私がこの作品を読んで感じることは、ジッドがミ歇尔を強い共感をもって描いていることである。ミ歇尔は思いのままに自由に、自己に忠実に生きている。ジッドもまた彼のように生きることを願っていたのではなからうか。

『狭き門』のアリサは、愛しているジェロームにふさわしい徳を身に付けるために、信仰の道に進んだが、ついにはジェロームよりも神を愛するようになり、彼を見捨ててしまった。そして彼女は心も命も神に捧げ、小さな病院の一室でむきだしの壁を見つめながら死んで行った。ジッドはこのようなアリサを非難することなく、共感をもって彼女を描いている。この作品を書いたときジッドは40歳であったが、その時彼はアリサのような生き方をしてみたいと思っていたのではなからうか。前にも述べたように、ジッドは『背徳者』のミ歇尔についても、彼を非難することなく、共感をもって彼を描いている。この作品を書いたときジッドは33歳であったが、その時彼はミ歇尔のような生き方をしてみたいと思っていたのではなからうか。

アリサの生き方とミ歇尔の生き方は表面的には全く異なっているが、2

人とも自分を大切にし自分に忠実に生きたのであるからその生き方は全く同質であると言えるのではなからうか。要するに、『狭き門』と『背徳者』という作品を通して明らかになったことは、すべての人間の奥底には聖性と悪魔性が同居しているということである。すべての人間は善人でもあり悪人でもあり、そのどちらか一方であるということはあるにない。『狭き門』には人間の聖性が『背徳者』には人間の悪魔性が特に強調されて描かれている。

注

- 1) 新庄嘉章解説「ジッドの生涯と作品」〔ジッド著(山内義雄訳)『狭き門』、新潮文庫、1997年、226-227ページ〕。
- 2) 同上書、227ページ。
- 3) GIDE (André), *La Porte étroite* (André Gide, *Romans, Récits et Soties, Œuvres lyriques*, «Bibliothèque de la Pléiade», 1958, pp.493-598).
- 4) *Ibid.*, p.558.
- 5) *Ibid.*, p.594.
- 6) アンドレ・ジッド作(川口 篤訳)『狭き門』、「あとがき」(岩波文庫、1996年、218-219ページ)。
- 7) 同上書、219ページ。
- 8) 同上書、220ページ。
- 9) GIDE (André), *L'Immoraliste* (André Gide, *Romans, Récits et Soties, Œuvres lyriques*, «Bibliothèque de la Pléiade», 1958, pp.365-472).
- 10) *Ibid.*, p.435.
- 11) *Ibid.*, p.436.
- 12) *Ibid.*, p.453.
- 13) *Ibid.*, p.367.
- 14) *Ibid.*, p.368.